

効率性と定石選択

基本理論：効率性は、次の狙い手の有無によって大きく変わる



越田 正常

Koshida Masatsune

(有)日本囲碁ソフト代表

■大阪府出身。信州大学卒。囲碁講師（アマ6段）。囲碁関西マンガ「岡目八目」の構成企画、学習ソフト「プロの碁」シリーズ、「死活アタック」、「布石定石AI」、対局ソフト「本因坊」、「囲碁初段」、「ミニ碁」、「すぐ碁が打てる」の企画・開発に携わる。インターネット上で、リアル対局場、ボード対局場を運営。著書に『パソコン&インターネット囲碁入門』（新紀元社）、『碁の方程式「基礎編」』（竜王文庫）。E-mail：igosoft@sun-inet.or.jp

1. 定石の選択

定石選択における**価値観**や**評価基準**は、**構想**という戦いでの効率性としても、重要な位置を占めています。定石の局所的な評価は、すべて互角とされているのですが、全局的な評価としては異なり、将来起こるであろう戦いへの**活用の大きさ**で、その評価に優劣の差が生まれます。この評価の違いを囲碁理論の視点から考えてみることにします。

(1) 定石の選択

昭和51年に『現代定石活用辞典』が、日本碁界を代表する呉 清源九段によって、誠文堂新光社から出版されました。この本は、他の定石本と違って、布石での石の配置における定石の活用方法に主眼が置かれ、定石の選択、評価が呉 清源九段の意見として述べられています。本の構成は、「定石後の狙い」と「定石の注意事項」などの項目から記述されています。

(2) 『現代定石活用辞典』による効率性

この本では、定石選択の評価において、定石後の次の狙いの有無が非常に重要視されています。そのため、**法則**として、

定石の選択において、定石後における次の狙いがあれば評価は◎になり、なければ×になる

ということがいえます。次の狙いとしての項目を分類、整理してみると、

- ① 打ち込みの手があるか
- ② 一手で、自分の守りと相手への攻めの一石二鳥の効果があるか
- ③ 打った手からさらに勢力を広げることができるか
- ④ 厚みを次の争点における戦いに活かすことができるか
- ⑤ 手入れが必要な守りを省略できるか

などがあります。これらの価値の大きさが、効率性の対象になっています。

(3) 一手の効率性

効率性としての評価では、**構想における自由度**、つまり、**戦いの優位性**がもっとも重要になります。これは、戦いの優位性と勝敗を決定する確定地の大きさとの関係が、「戦いの優位性を確保することによって、最終的に地を囲う効率の良い石を配置することを可能にする」と考えられるためです。戦いの優位性という価値は、「眼形の効率化」、つまり、「生きるスピードの効率化」、また、「生きた石の活用化」が第一目標となり、地の大きさとしての価値は、戦った結果得られた「余剰的な価値」としての第二目標になります。つまり、

$$\text{効率性} = \underset{\text{(第一目標)}}{\text{生きる効率}} + \underset{\text{(第二目標)}}{\text{地の効率}}$$

という基本式になります。これに関連して、

- ① 単に地を囲う手は、効率が悪い
- ② 戦いの評価は、利筋の多さ、次の狙い、先手の権利などの有無で評価される
- ③ 完全に生きた石でも、次の攻撃目標があると効率が良い

ると効率が良い

- ④ 攻めることができる弱い石があれば、利筋や次の狙いが生まれやすい
- ⑤ 厚みの石は、地として囲うより、死活などの戦いに関連する方が効率が良い
- ⑥ 「切断」「消し」「反発」「打ち込み」などの利筋の有無が効率性に関係するなどの法則があります。このことを念頭に置きながら、『現代定石活用辞典』で紹介されている参考図を例に、その評価についての価値基準を考えたいと思います。

2. 定石1：打ち込みの狙い

(1) 評価の違い

図1と図2は、白1、黒2、白3まで定石として同じ手順で進行していますが、図1の場合は、次に黒イと打たれると白の悪い定石の**選択**となり、図2の場合は、白の良い定石の**選択**として評価されています。これらの評価が違う要因は、定石が打たれた後の「白からの次の狙い」の効率差にあります。

図1 白の悪い定石選択

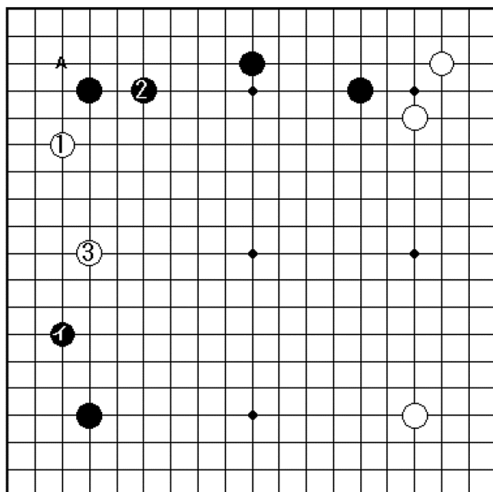


図2 白の良い定石選択

